

【草花の部屋】

ピーマン (ナス科トウガラシ属 *Capsicum annuum* L. 'grossum')

和名：ピーマン **別名**：西洋唐辛子 **英名**：bell pepper

ナス目 一年草 **原産地**：中南アメリカ

花言葉：海の恵み、哀れみ **花色**：白



← 写真-1 ピーマン

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

▽ 写真-2 ピーマンの花

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-3 ピーマンの果実

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

大和郡山市郊外の家庭菜園で見かけました。特別、珍しい植物ではありませんが・・・。

ピーマンはトウガラシの品種の一つですが、果実が肉厚であり、辛み成分のカプサイシンを含まないことが特徴です。また、パプリカなどのいわゆる「カラーピーマン」では、未熟な場合は緑色などですが、熟すと赤色やオレンジ色などの鮮やかな色になります。

葉は卵形で、互生。葉の脇に、花卉が5～8枚の白い花を下向きにつけます。暖かい場所を好み、多湿と乾燥に弱いので要注意です。ピーマンの栽培は容易で、初心者向けの野菜であるとも言われていますが、ピーマンに発生しやすいとされる病気はアブラムシが原因で発生するモザイク病に要注意です。また、雨や水やり時に泥が跳ねてしまうと病気の原因になるため、敷き藁などをすると良いそうです。

ピーマンは主枝の8～9節に1番花をつけ、以降、各節に花と脇芽をつける性質があります。1番果を完熟で収穫すると若い株に負担がかかるので、1番果は若取りします。1番花のついた脇芽は強く伸びるので、そのまま伸ばし、それより下のわき芽は早めに摘み取ります。また、主枝の2番花がついた節の脇芽、最初に伸ばした側枝の1番花の節の脇芽も強く伸びるので、計4本を主枝として育て、支柱に誘引します。以降、4本の主枝から出てくる側枝は、3節で摘芯して、上部のわき芽の発生・生長を促します。貧弱で着果しない側枝(無効枝)や、込みすぎた脇芽は早めに間引いて、株全体の日当たりをよくしてやります。

日照不足や栄養状態が良くない場合には雌蕊よりも雄蕊のほうが長い短花柱花が増え、落果がしやすいという特徴があります。病害に対する抵抗性は持たないので、連作をは避けるようにします。

ピーマンは、アメリカ大陸を発見したコロンブスがヨーロッパへ持ち帰り、香辛料として広まったとされています。日本には16世紀に紹介されていますが、それは今日の「トウガラシ」で、「ピーマン」とは全く別物でした。現在のピーマンが日本に入ってきたのは明治時代で、品種改良されたイスパニア種(辛みのないトウガラシ)がアメリカから持ち込まれてきたものだそうです。

花言葉「海の恵み」の由来や理由は不明だそうです。どうやら日本だけの花言葉との説もあるようです。